

である。2号坑は開発初期で鉱量算定に至らない。

#### 5. 現況其他

事業主 ヤマカ製陶所

### III. 紫田高峰鑛山

#### 1. 位置及び交通

苗木駅北東3km, 現場まで馬車を通ずる。

#### 2. 鑛床

約50mをへだて3本平行するアプライト脈で走向N30°W, 直立である。1坑は細脈で掘りつくされている。2坑は幅4~5m, 延長50~60mに及ぶアプライト(「長石」として良質でない)の脈の中央部にカオリン化した部分があるが小規模で採行価値に乏しい。3坑は幅1m, 延長10m以上と見られるアプライト「長石」脈で苗木高峰鑛山の2坑と全く類似している。半露天掘。

#### 3. 鑛石

カオリンは良質のようであるが、殆んど採掘するに値する量が見られない。長石は苗木高峰鑛山のものと同様の風化したアプライト質で石英は少く(20%程度)不純物も少い。

#### 4. 鑛量

第2坑のアプライトはやゝ大きいので下部で良質となれば相当量見込み得る。

#### 5. 現況其他

休山中, 事業主 瀬戸市柴田商店

### IV. 結 言

#### 1. 長 石

井汲鑛山の長石はベグマタイト質の良質のものである

が、残鉱が少ない。その他のアプライト質風化「長石」は風化の度合がまちまちで、又不純分の少い所は必ずしも大量のまとまつたものでないで、地方的原料として以上の重要性はない。

#### 2. カオリン

部分的に良質であるが量的には全く期待出来ない。今後詳細な地表探鉱を行えば、いくつかの小鉱体はこれを発見し得るものと見られるが、全国的需要の対象としての事業が成立するものの発見は期待薄であろう。しかし地方的自家用原料として小規模に採掘するのは、意味が充分認められる。

なお、共立窯業原料会社による焼成(SK 13)試験結果は次の通り。

#### 1° 井汲鑛山特選長石(ベグマタイト質)

白色半透明に溶解する。褐色の汚れがあり、大量に揃えば研究価値はある。

#### 2° 同上1号長石 (アプライト質上鉱)

褐色の汚れのある白色半透明に熔融した。

#### 3° 同上風化長石 (アプライト質下鉱)

帯黄白色の不溶物が多数混在する白色に熔融する。黒褐質が多数混在する。

#### 4° 苗木高峰鑛山白土 (カオリン原土)

粘力が劣る、黒色ネズミ色物の混在する灰白色に焼上る。やゝ不均質で呈色は劣るが、精製すればよくなるであろう。

#### 5° 同上排土

粘力が劣る。褐点多数混在する白色、白色熔融物の混在があり、不均質で良好ではない。

553. 574+613: 550. 8 (521. 16)

### 福島縣口太山白珪石・長石鑛床に就て

安 齋 俊 男

#### Résumé

#### On Kuchibuto-yama silica-stone and feldspar deposit in Fukushima prefecture.

By

Toshio Ansai.

The deposits of Kuchibuto-yama, which is located 6 kms south from Kawamata-machi are three lenticular pegmatite in biotite granite. Ore consists mainly of quartz with comparatively small quantity of feldspar.

Both quartz and feldspar are of high grade and their possible reserves are estimated at 3,000 tons.

昭和24年4月13日、福島縣口太山白珪石、長石鑛床を視察する機会があつたので、その結果を発表する。

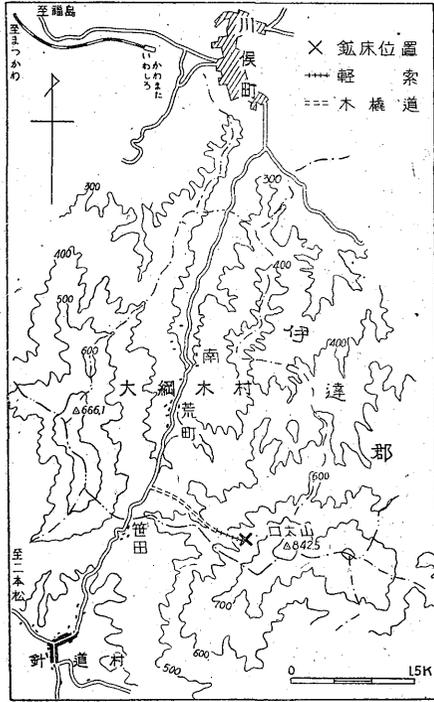
#### 1. 位置・交通・運搬

福島縣伊達郡大綱木村境木の官有地内にあり、川俣駅の南方約6kmに位する。運搬は山元輕索200m, 木櫃(1回約1/2t)道1.6km, 及びトラック6kmで川俣駅に至る。

## 2. 地質・鑛床

阿武隈川東岸の花崗岩地帯で、やゝ片状を呈する黒雲

母花崗岩よりなり、著しく変質した優黒質の岩脈が多数之を貫いている。



第 1 図

鉞床は花崗岩中のペグマタイトで、口太山(842 m)の西斜面約600 mの地点にあり、本地方のペグマタイトとしては最高所に存在するものゝ様である。いわゆる川俣のペグマタイト群は北方約10 kmに、又戸沢村のペグマタイト群は南方4 kmにあり、又口太山周辺にはなおいくつかのペグマタイトの存在が知られている。鉞床は3個のペグマタイトよりなるものと見られる。

イ) 第1坑 西向の傾斜面に存在する露天掘跡で、直径10 m 弱の白珪石の露出とその下方約5 mにある探鉞坑内において白珪石が見られる。上方掘跡では北東端に約1 mの幅で長石、珪石混交帯が見られ、花崗岩に移行している。

珪石は良質であるが、長石質のものは現在の所稼行価値ある部分は認められない。

ロ) 第2坑 第1坑の南西約30 m, 10余下方に存在する小露天掘跡で、調査当時鉞石は見られなかつた。

ハ) 第3坑 第1坑の西方約80 m, 約30 m 下方に存在する。当時の状況では鉞体の形、規模は明らかでないが、坑内の状況は、中央部、南壁及び北壁に直立の黒雲母の集合体から成る薄い黒雲母帯があつて、母岩への移化が推定され、この部分の鉞体の厚さは2~4 mである。

坑内西半は、南へ25° 約15 mの斜坑で、その上方西

壁及び引立に長石の発達が見られる外は良質珪石帯の中を進んでいる。坑内東半は緩く、上り坑になり東南の方向に鉞体が膨らみ、その南壁は長石の発達が著しい。

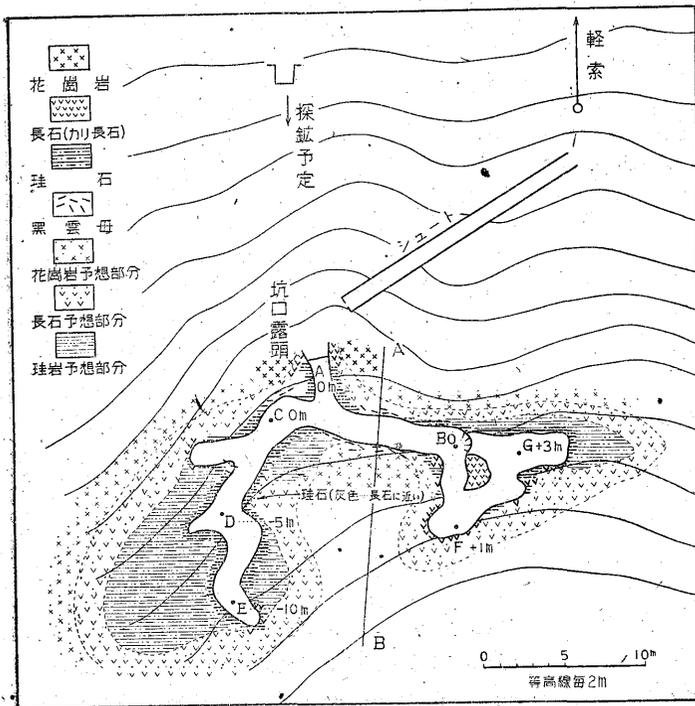
坑内に於ては直接母岩に接する部分は見られず、長石又は黒雲母の存在によつて鉞体周辺を推定し、石英の灰紫色化により長石帯に近いことを推定するに過ぎないが、以上の坑内状況から次のような3つの場合を予想し得る。

1° 坑内西半、東半を2つの鉞体にかけて考え、夫々独立の塊状鉞体と見なす。

2° 南西に落した薄いレンズ状鉞体と見る。

3° 中央の黒雲母体を鉞体内に取り込まれた母岩の名残と見なして、この部分を含めて、南西に落した厚いレンズ又は塊状の鉞体と考える。

1°の場合には鉞床は小規模なもので、大きな鉞量は期待出来ないが、2°3°の場



第2図 口太山白珪石長石鉞床第3坑坑内図

合を考慮すれば、そのいづれの場合にも、坑内南西端の最深部を中心とする探鉱による鉱体の形と規模とを明かにする必要がある。

### 3. 鑛石

イ) 白珪石 純白色半透明質で殆んど汚れが見られない優良のものである。長石に近ずけば灰色を呈するが、現在このような部分は全体の10~20%程度である。

概ね光学30%特選50%程度に選別し得るものと見込まれる。

ロ) 長石 淡灰色のカリ長石を主とし、所々に白色ソーダ長石を混えている。割目に沿い白雲母の薄層を伴うが、これは一般に長石鉱石には常に伴うものであつて、特に欠点とは云えない。水洗手選鉱を充分に行えば、約50%を特選として選別し得る。

### 4. 鑛量

イ) 第1坑

1° 珪石…約 $1 \times 10^3$ t…(予想)

2° 長石…珪石の周辺に存在が予想されるが鉱量算定に至らない。

ロ) 第2坑

鉱量算定の基礎がない。

ハ) 第3坑

[註] 中央部黒雲母帯を鉱体内の母岩の名残と考え、更にあつてレンズ状鉱体を予想すれば、鉱量は更に増加する。

1° 珪石…約 $2 \times 10^3$ t

2° 長石…珪石の周辺部に数百屯予想し得る。

### 5. 現況其の他

約15年前に開発され、昭和23年より口太山鉱業所(田村忠義、中央区日本橋通3の7)の経営となり、新たに木樵道1.6km 軽索200mを開設し、再開準備中である。

労務者約20名、特に見る可き設備はない。

調査当時の生産原價としては、木樵(300円/t)及びカマス代(150円/t)が大きな割合を占めているが、省営トラックを安價に使用出来るので、償却費を除けば採算は取り得る。

### 6. 結言

本鉱床は縣内ペグマタイト鉱床の中でも特に珪石の品位優良であり、長石も品位の点で他に劣らない良質のものである。開発状況は若く、且つ鉱量も比較的まとまつたものと云え、今後の探鉱開発が期待される。

欠点としては運搬が極めて不便で特に木樵1,600mに依らねばならぬのは大きな欠点である。現在の所では珪石70t/月、長石20~30t/月程度が限度と見られる。

今後の方針としては第1坑の露天掘を速かに着手する事、及び第3坑の深部を中心としての探鉱及び東南側の長石帯の掘進を第一とすべきである。

現在の所水洗選鉱場の設備がないが、軽索下に之を設備する事が望ましい。

553. 612: 550. 8 (521: 15)

## 山形縣“肘折カオリン”鉱床調査

上野 三 義\*

### Résumé

### The report of “Hijiori” kaolin from Yamagata Prefecture

By

Mitsuyoshi Ueno

The “kaolin” deposit described occurs in Minamiyama, Okura-mura, about 1 km west of Hijiori Hot Spring, Mogami-gun, Yamagata Prefecture.

The deposit has originated hydrothermally, showing a bedded form with considerable extent, intercalated among tertiary pyroclastic formations. Workable area, howe-

ver, is limited to the dimension of about 150 m × 35 m with the depth of 10-20 m.

The ore is mainly consisted of kaolin with accessories, such as alunite, pyrite, quartz, opal, kaolinized feldspars, rutil etc. as proved by thermal experiment.

It is concluded that this ore may be not suitable for the raw material of high grade in ceramic industry.

### 1. 緒言

“肘折カオリン”は昭和12年末頃から陶磁器原料用の原土として開発され、昭和18年頃東京碍子工場にも出荷したと云われているが、未だ本確的な開発隊行は行われていない。戦後再び本カオリンが注目されるに至

\* 鉱床部員